

## 教育課程と子どもの学力・評価

## 子どもの実態からスタートした教育課程づくりで豊かな学力の保障を

大 口 久 克

## はじめに

3人の教育大学の学生を含む15人の参加者がそれぞれの問題意識を紹介しながら分科会が始まった。

各報告がなされる前に、司会から昨年の討議の様子が簡潔に述べられた。

2011年度の4月から本格実施される改訂学習指導要領であるが、現行の学習指導要領の導入の際に声高に叫ばれた「生きる力」、それを育てるとした「総合」の時数は今回減じられることになったこと。また、現行学習指導要領の改訂を先導した「新しい学力観に立つ教育」はどこに消えてしまったのかということなど、これまでの学習指導要領の変遷を批判的に分析しながら、学習指導要領を大綱

的な基準として「教育課程は学校が（主体的に）編成するものである」ということの内実を各学校ごとにどのようなようにあけていくか。昨年の分科会で報告された、子どもや保護者、地域住民の願いをくみ取りながら展開されている全道各地の個性的な実践は、教育課程づくりは学校づくりであることの認識を一層深めるものであった、と。

次に、特別報告として歴教の佐藤広世氏（札幌）から北海道の小学校教科書の採択の状況についての報告があった。現在北海道では、14支庁に10の市を加えた24の採択区で教科書採択がなされている。この8月に次年度から使用される小学校教科書の採択がなされたが、結果としてこれまで教育出版が光村書籍に変更となつたところが多い。とりわけ市部ではその半数が光村への変更となつていることは何を意味するのか、不明なところが多い。現場ではどのような手続で教科書採択が行われているのか、その実態がわからないのが現実である。授業の中軸をなし、子どもたちにとつても最も身近である教科書。その採択にあたっては子どもたちの実態を一番よく知っている現場教師の意見こそ最も大切になくしてはならないはずであるのに、見本本の公開箇所も札幌市では数カ所しかない。特に採択手続については密室で行うのではなく現場や市民によくわかるオープンな形で行うべきであるとの指摘は重要であった。

## レポートの概要

### (1) 語り合いからの出発

#### 礼文・香深中学校 特集 慶一

礼文町全体では、2006年～2009年、礼文検定を柱とした基礎学力の取り組みと、総合的な学習の時間にふるさと礼文に学ぶ礼文学とで、各中学校間の連携が進んできた。この大きな柱を軸としながら、中学校区（香深地区）での小中9年間の連携教育について報告する。

これまで年2回の授業交流で児童・生徒の学習や生活実態を交流してきたが、交流だけだとどまることなく課題解決に向けた具体的な取り組みについてが協議されるようになった。その協議の場の香深地区の小中連携教育推進協議会では、「研修プロジェクト」「英語プロジェクト」など、6つのプロジェクトにわけながら、①学力向上②心育て③教師・保護者との連携を柱に据えた。

上からの押しつけの連携ではない、子どもたちの実態から出発し、先生方の願いから生まれた連携は具体的な実践になっていった。その一つが中学校教師の専門性を小学校の指導に生かすことであり、小学校の外国語活動の指導計

画を中学校の英語教師も一緒に作成したり、学期に数回校区の小学校5・6年生を集め外国語活動を行うことになった。

また、教師だけではなく、親同士の学び合いが小中合同の地域懇談会へと発展し、「このような場であればもつと周りの親に声をかけて参加したい」という声も多数聞かれるようになった。

連携をという外枠をまずつくりそれに関係者を当てはめるのではなく、関係者自身が内側から連携をつくりだしていく。このことが発展性の鍵だと考える。

### (2) 南中の未来を語る／稚内南中学校の

#### 教育課程の見直し・改善の取り組みの始まり／

#### 稚内南中学校 阿部 諭

かつて大きな荒れも経験した本校であるが、昨年「創立六十周年」を迎えることを契機に、「過去に学び」「地域・ふるさとに学び」そして「未来に向けて」の取り組みを2カ年計画で行うことになった。

その取り組みの一つが「南中の未来を語る会」であった。生徒、保護者、卒業生、地域関係者、歴任教職員が集まり、これからの南中についての希望を語り合ったことは、生徒自身への大きな激励となっていた。

「南中の未来を語る会」(2010年8月29日)は、子どもたちの力で準備し運営された。3年生が司会、2年生が記録を担当。会場案内・接待、南中ソーランの演舞による歓迎、開会式の進行も生徒自身によるものであった。

話し合いは30余のグループ(各15名程度)が40分討議し、休憩の際に話し合いの結果を模造紙に書いたものを掲示し、どの意見に一番賛同できるかを投票形式で意見集約する形をとった。

「地域活動の頑張り。地域では南中生がいないと成り立たないことがある」「生徒と先生の信頼関係」などが、中のいいところとしてあげられたり、「不要物」「身だしなみ」などが改善点として指摘された。そして、シンボルである南中ソーランはもとより、地域活動を大切にし、伝統を後輩へ伝えていくことなどを、「今後大切にしていくこと」として参加者から希望されることになった。

「語る会」で出された南中に対する様々な思いを汲んで教育課程に反映していくことは言うまでもないが、この会を通して子どもたち自身が先生・保護者・地域から大きな激励をもらい、自信をつけた。そしてこの会は、「自分の学校の未来を本気で語り合える」と思える南中生に成長したからこそ行うことができた南中の特色ある教育活動の一つとなった。

### (3) テレビが子どもから、考えるための「言葉」と抛り所となる「親」を奪った

俱知安町 長尾 靖友

昭和50年頃からテレビの普及が右肩上がりになるが、それにもなつて子どもたちの学力が低下していることが、中学3年生に行つたテストで昭和52年では平均点70点であったのに、昭和62年では平均点20点に下がったことからわかる。

このことと同時進行で校内暴力や不登校、いじめなどの諸問題が表面化していくことになる。この30年間子どもたちの問題を自分なりに追い続けてきたが、テレビの普及と子どもたちの学力低下が比例していることを指摘せざるを得ない。

またテレビの普及は、それまで丸いテーブルを囲んで家族が食事をした「丸テーブル型家族関係」を、テレビに対して家族個々が一方に向いている「テレビ介在型家族関係」へと、家族関係の根本を変えることになった。このことは、子どもたちが他人との直接的な関係づくりをすることを困難にさせていった。

また、昭和57年から高校入試で内申点が重視されることになる。このことが教師と生徒の関係の摩擦を大にしてい

ることが、「内申点をなくしたら間違いないうちの学校は荒れます」というある教師の言葉からも察することができ

る。現在は絶対評価ではあるが、子ども・保護者・教師に染みこんだ成績意識（学校価値観）からなかなか抜けきれないのが現状である。この刷り込まれた価値体系に対抗しうる子育て・教育姿勢は、新しく学校価値を構築し直すことから始めなくてはならない。

内申点で追いつめられ、他人の評価で動き、故に間違いうことに恐れる子どもたちは、「いい子」でいようとするために疲れ切っている。子どもたちに今必要なのは、自由な時間、自由な空間、そして権威ある大人（人間）の存在ではないか。今日の学校価値観をほんの少し変えるだけでそれが可能だと考える。

#### (4) ふるさとを感じて学んできた子どもたち

く学びづくり・学力・評価について考えるく

江差南が丘小学校 中山 晴生

学力不足をことさら強調し、鍛錬的に漢字や計算を繰り返し練習させたり、学力テストのための学習をさせる。また教師の専門性を脅かすような学習プリント（道教委作制）をさせる、などの学習指導が横行していることに大きな疑

問を持つている。

誰のための学習なのであろうか。

子ども自身が、自分の発達のペースに則し、自分の要求に根ざした学習。ユネスコの学習権にうたわれている、「何か効果を上げるための手段に止まらず、それ自体、子どもが人間らしく生きていくための権利」に根ざした「学び」について相応な構えで検討する必要がある。

「宿題を忘れました。ごめんなさい」を連発する3年生。子どもたちのこんな窮屈さを何とか解放したいと思い、「おもしろい場所をつくらう」と呼びかけた。子どもたちに話し合いをさせながら、「おもしろジャングル」、「おもしろ池」をつくることに。そして、そこにカエルが卵を産み、オタマジャクシになったり、ボウフラを食べている姿を子どもたちは目の当たりにする。そして、「池の水がくさっているのにオタマジャクシはなぜ生まれるのか」など、新たな気づきや疑問も生まれた。そのことを「チャレンジ5」（総合学習）で発表することになるが、五官を通して感じたことを表現することには子どもたちは驚くほどの力を発揮することになった。

4年生の「チャレンジ5」では、五勝手浜の漂流物を調べることになった。子どもたちが興味を持ったのが外国からの漂流物。旗やベットのボトルなどに書かれたハンダ文

字の解説に子どもたちは夢中になって取り組んだ。

プロセスではなく結果のみが重んじられる時代となつてしまった。学習もまたしかりである。檜山の先達が「ふるさと学習」と称して大切にしてきたのは、人・自然・歴史とのかかわりを大切にしながら、学びそのものに喜びを持てるような人格を形成することであつた。その灯を消さぬよう力を尽くしたい。

(5) 「地方高校」勤務の八年間から学んだこと

く生徒が変わり、学校が変わり、地域が変わったく

北見北斗高校 徳長 誠一

前任校は稚内高校であつた。普通科四間口・衛生看護科一間口の地方の高校ではあるが、3年間文系・理系に分けない自然学級としていた。2年次には全員に数学ⅡBを必修にしているのも特徴である。そういう中で少なくとも生徒が国立大学に合格したことは、地方の高校の地域への信頼を高めることになつた。

道教委は高校の多様化路線を進める中で地方の小規模高校を「地域キャンパス校」とし、近隣のセンター校から教師が出張授業をしたり、高速通信を活用し遠隔中継授業を実施することとした。稚内高校は、地域キャンパス校である豊富高校のセンター校となり、自分が出張授業や遠隔授

業の当事者となつた。

「学び直し」を要する生徒達も少なくないキャンパス校ではあるが、高校生のもつプライドも大切に、基礎・基本を確認するとともに背伸び的な内容を盛り込むようにした。そして、そこの大学進学希望者にも質問等に対応しながらいいねいな取り組みを展開してきた。

(6) 生活科でのふるさと学習を通して

上ノ国小学校 鈴木 真弓

本校に異動する前に見た上ノ国小の公開研で、模造紙にかかれた子どもたちの気づきや疑問の多さに驚くとともに、「ミツケしよう、ミルミルしよう、探偵団」など子どもたちの知的好奇心に迫る言葉に感銘を受けたのを覚えている。

本校では2年生の生活科でふるさと学習を実践してきた。

これまで水産加工場を見学したこともあつたが、今回はピザ屋さん（イタメシ屋さん）の学習をおこなつた。子どもたちの疑問（ピザを1日何枚作るか、自分の名前が店の名前になつたか）を整理し、予想をたてながら、本人に聞き取り調査をした。そして、楽しい雰囲気の中でピザ作り体験も行うことになつた。

また、共同授業者として地域に住む専門家や地域で働く

方からお話を聞く時間を設けている。共同授業者は、上ノ国への熱い思いと自分の仕事への誇りを持って子どもたちに熱く語りかけてくれる。

そして3学期にはこれまでのふるさと学習をまとめ、「ふるさと学習発表会」を開き、調べてきたことを新聞、ペーパーアート、劇、紙芝居などにまとめ、1年生や保護者にも聞いてもらっている。このことは自分たちのまとめたものを聞いてもらい評価されることで、自分たちの充実感・満足感につながっている。

「低学年でも自分なりに気づきや問いをもてる」ということが実感できた。その時に、五官を働かせることも重要で、国語科の綴る学習との関連も密にしなくてはならないと考える。そして、共同授業者の語るホンモノに子どもたちの心も揺さぶられることも知ることができた。

#### (7) 保健室からの発信—子どもの実態調査報告—

##### 高教組養護教員部常任委員会

「子どもの状況がみえない」と言われる中、養護教諭自身が子どもの実態や現状をどのように感じているのかを出し合うことが大切ではないかと考え、全道の養護教諭にアンケートを依頼したところ58人から231の記述回答が寄せられた。

調査項目は、「性に関するトラブル」「発達障害」「精神障害」の3点に絞った。

「性に関するトラブル」では、在学中・退学して・卒業後すぐに出産に至った事例15件、売春・DVを含む性犯罪行為への関与または被害事例28件であった。「発達障害と思われる生徒の事例」では、対人関係でのつまずきや集団生活への不適応の事例26件、学習面での問題の事例8件、教室に入れず保健室で対応した事例15件であった。「精神疾患に関すること」では、学校生活を送りつつ通院・治療している子どもの事例25件、学校での様子から受診の勧めや援助を行った事例17件、退学・転学した事例7件であった。

記述回答が物語るのは、養護教諭自身が子どもたちの抱えている課題の最初の発見者であり最後の防波堤になりうる立場にあり、そして発信できる位置にいるということだ。

どの子も、いつでも、評価なしで、無料で受け入れられる大人の存在は貴重ではないか。

0才から20才までの発達を見通した支援をするためには、乳幼児は地域保健、学童期以後は学校保健、その後は市民として再び地域保健という分化のそれぞれが密接な関わり合いをもつことが重要である。保健所や学校どうしの結びつきは欠かすことのできないことである。保健室からの発信は、子どもの示す事実からその課題を明らかにし、

課題解決向けの道筋を示唆するものである。子どもたちの成長を励ますためには、子どもに関わる様々な立場の人たちが手をつなぐことが重要なことであることを改めて思い知らされることになった。

(8) 教育課程と授業 その隙間で構築する 授業実践について

札幌・石山南小学校 佐藤 広也

4年、5年、6年と持ち上がった子どもたちと、総体（アンサンブル）としての学力を求めて、調べ学習を行ったり、ものごとと情報と関わりながら発信する子どもへと育てる学びづくりを実践してきた。

特に、総合的な学習の時間において、札幌市教委の委託授業・文科省の環境教育プロジェクト授業を受けて、「中央図書館を活用した調べ学習 生物多様性ニホンザリガニから考える」「新しい図書館スペースを作るために本を借りよう 図書館改造計画」「2年生に図書館の歩き方と伝えよう」を柱に、6年生と2年生が札幌中央図書館で一日をかけて授業を行った。

学習活動でコンピュータの使用は欠かせないものであるが、コンピュータリテラシーを習得するだけで子どもたちの認識が深まるものとなるのか。重要なことはコンピ

ューターリテラシーを含んだメディアリテラシーなのではないかと考えている。子どもたちはコンピューターで検索したときに出てくるたくさんの言葉に対して、その言葉がわからなければ何が出てきても意味がわからないことを指摘し、「コンピューターよりも図書館がいい」という声をもらすようになった。

5年生で国語で学んだ「サクラソウとトラマルハナバチ」を契機に、生物多様性についての学びを深め、特定外来種、受粉とハチの関係はトマト栽培にも関心を広げることになった。

そして、農薬散布による昆虫の絶滅はレイチエル・カーソンの「沈黙の春」への学習にも発展し、かつての石山の風景とレイチエルが当時書き表した風景とが合致することが祖父母からの聞き取りからもわかることになる。

それらの調べ学習にパソコンはもとより図書館そのものの活用が有効である。その活用の中で知識を知恵に変えることを願っている。

(9) やって見たら楽しかった！

勉強が好きになつていく子どもたち

釧路市・芦野小学校 笹本 裕一

3年生を担任した4月。39人の家庭訪問のとき、全家庭

から「宿題を出さないんですか?」「宿題を出さなくて学力がつくんですか?甘いんじゃないですか?」と、声を合わせたように言われた。

聞いてみると、低学年の時には一日にプリントが10枚あったときもあるという。そして、その時には親自身も大変だったとのこと。私は宿題を出すことをしなかった。授業そのものに子ども達が積極的になれるものに改善したり、子ども達と遊ぶことに重きを置いていった。子ども達自身が一生懸命に遊ぶことで課題が解決することがあるからだ。

何ヶ月か経ち、保護者の反応も「だんだんと変わってきた。宿題がたくさん出されたときよりも子ども達が学習を進んでやるようになったというのだ。そして、学校のことをよく話すようになったと。先生の考えで子どもも伸びているようなのでいいですとの肯定の声もささやかれるようになった。

家庭学習を一度もしたことのない男子が3学期に突然やってくるようになった。漢字を短文の中で覚える努力をしている友達の様子を学級通信で伝えていることもきつかけになったかもしれない。家庭学習ノートにはたっぷりと励ましの言葉を書いた。

通信にも彼の努力を取り上げ、「子どもが変わろうとしているとき、それを強く感じて心から応援したい。勉強す

ることにプレッシャーをかけ続けていたら、子ども一人ひとりの育ちや変化が見えにくくなっていったと思う」と書いた。

授業では子ども達とにかく話し合いをさせた。一見もどかしく見えるこの営みではあるが、話し合いの素晴らしさは、次第に考えが深まっていき、発見をして真実をつかむことにある。子ども達は課題設定の仕方での学習に大きな意欲を示す。私は、「課題とは目標を越えて次の学習内容と意欲を準備するものでなくてはならない」とおさえ、子ども達が学習への意欲と気づきを最大限に引き出す手立てを絶えず考えていくことにしている。

## 討議の概要とまとめ

宗谷からの二つの報告は、子ども達にかかわる多くの者がイデオロギーや所属の別を越えて、真の意味での「連携」をめざし大きなうねりをつくりあげてきたという歴史的な風土に培われた実践である。それを「宗谷」だからできると片づけてはいけない。宗谷における「連携」をするときの視点、その教育的意味から教訓を汲み取り、それを他の地域の実情に合わせて生かして行く必要があるのではないか。



稚内南中学校の「未来を語る会」。自分たちのことをみんなにもたくさん励ましてくる人がいるのかという実感が、子ども達を一層成長させるものである。「北風」ではなく、「太陽」としての地域の存在意義を感じさせる報告であった。

長尾報告では、子ども達の置かれている文化の状況について触れられた。とりわけテレビ・ゲームが子ども達の生活に与える悪影響については改めて見詰め直さなくてはならない。フィンランドの留学生が「日本の高校はフィンランドのまねをした方がいい」という指摘は、高度な競争に塗り固められた日本の教育制度への大きな警鐘ととらえることができる。

檜山からの二つの報告は、檜山の先達がこだわってきた「地域に根ざす教育」「ふるさとに心がむく教育」を現代的に取り組んだ実践であった。結果のみが重んじられる現在の学校において、学習のプロセスを大切にし、バーチャルではないホンモノ（人・もの・自然）に直面することが子ども達の成長を大きく励ますことであることが確認された。子どもを見つめる目が温かさであふれていたのが笹本実践（鉋路）であった。マスに文字を書くのも容易でない3年生が3学期に突如として家庭学習をやってくるようになる、4年生になっても続いているという。そこにまでいた

る、学級づくりや学習指導に貫かれる子ども達の能動性に依拠した取り組みが、子ども達のやる気を一層かき立てることになったことがわかる。宿題がないほうが学習をするようになったという保護者の感想が、強制と競争を原理として学習させようする風潮に大きな風穴を開けたと言える。

実践者がこれまで蓄積してきた相当量の知見を駆使して子ども達に深い「学び」「探求」を求めてきた佐藤実践（札幌）は、調べることを「総合学習」だけにしてはいけないと、様々な領域から子ども達の積極的な学びをつくりだしてきた。「センス オブ ワンダー」(レイチエル・カーソン)が子ども達の知的好奇心を喚起させる源でもあることが指摘された意味は大きい。

徳長氏は、センター校からキャンパス校への出前授業をおさなりではなく子ども達の実態に合わせた授業となるように組み替えていった。また、高校生のプライドを大切にするとすることは、生徒の人格を尊重することでもある。子ども達に向かうそういう姿勢が授業者への生徒からの求心力を大きくしているのではないか。

教育課程づくりとは、教科・教科外を含む教育活動の全体計画づくりである。それは単なる時数合わせの形式的な計画ではなく、地域や子ども達の実態から出発し、地域や子ども達の願いに応えるものでなくてはならない。そのた

めには、子ども論・子どもの発達論・授業論・学校論等の本質論議を各学校で旺盛に展開する必要がある。

そのことが強制と競争を原理にした学びから大きく脱却する教育課程への道筋をつくりだす。今回の全ての報告がそのことを物語っていた。